

## 第6回 ニッケピュアハート エッセー大賞

<中学の部 優秀賞>

### 「今年で五代目」

大泉萌

四月になった。また、あの季節がやってきた。私は、勉強机の横にあるピアノの下をのぞきこんだ。そこには、小さな箱が置いてあった。「インゲン豆・五代目。」箱の表にはそう書いてある。

あれは、私が小学五年生の時だ。理科の先生が、私たち生徒に、一人一粒ずつインゲン豆の種をくれた。私は、ためしに植えてみることにした。ちょうど、理科の授業で学習したところだったから、植え方は知っていた。私は毎日水をやった。次の日も、そのまた次の日も、水をやった。数日後。ついにその日がやってきた。芽がでていたのだ。小さくて可愛らしい芽がニョキッと顔を出していた。私はうれしくてたまらなかった。インゲン豆の成長は、驚くほど早くて、何週間かすると、私が見上げるほどになっていた。そのうちに実ができて、お皿にちょこっとインゲン豆が並ぶようになった。

今年でそのインゲン豆も五代目。緑色だったインゲン豆の種も、なぜか黒色に変わっている。これも、遺伝かな、と私は思う。私の五代前の人達は、一体どんな人なんだろう。このインゲン豆だって、そんなことも考えるのだろうか。今思えば、インゲン豆をくれたのには、すごく深い意味があるんじゃないかと思う。

人だって、植物だって、おじいちゃんもいればひいおばあちゃんだっている。どんな顔で、どんな性格かも分からないけれど。命はずっとつながっている。だからこそ、命は尊い。改めて生きることのつながりを学んだ。私たちは、毎日たくさんの命をいただいている。どんな時も感謝の気持ちで、未来に命をつないでいきたい。

私は、箱の表に「インゲン豆・六代目」と書き、いつもの場所に、そっと置いた。